

研究区分	教員特別研究推進（教育推進）
------	----------------

研 究 テーマ	第二言語学習者による英語非対格動詞の過剰受動化現象				
研究組織	代 表 者	所属・職名	国際関係学部・助教	氏名	岡村 明夢
	研究協力者	所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
		所属・職名		氏名	
	発 表 者	所属・職名	国際関係学部・助教	氏名	岡村 明夢

講演題目
第二言語学習者による英語非対格動詞の過剰受動化現象
研究の目的、成果及び今後の展望 本研究の目的は、日本語を母語とする英語学習者が英語の非対格動詞を誤って受動態化する現象、いわゆる過剰受動化に焦点を当て、その要因を明らかにすることである。特に、文の主語名詞の性質、学習者の英語熟達度、個々の動詞の語彙的意味が、過剰受動化の生起にどのように関わるのかを検討した。従来、非対格動詞の過剰受動化は、非対格構文と受動構文に共通する統語的移動の類似性によって説明されてきた。しかし近年の研究では、過剰受動化はすべての非対格動詞や文脈で一様に生じるわけではなく、主語の有生性や移動可能性、文脈上の解釈、母語の影響、動詞ごとの意味特性によって変化することが示唆されている。 研究成果として、米国アリゾナ州で開催された Second Language Research Forum 2025 にて、「The Influence of L2 Learners' English Proficiency on Overpassivization Errors of Unaccusative Verb: Focusing on the Difference among Individual Verbs」の口頭発表を行った。本研究では、日本人大学生 316 名を対象に、Oxford Quick Placement Test によって英語熟達度を初級、下位中級、上位中級の 3 群に分類したうえで、選択強制タスクを実施した。実験では、主語条件として、移動不可能な無生物主語、移動可能な無生物主語、有生の人間主語の 3 種類を設定し、<i>arrive, fall, come, appear, die, disappear, exist, remain, belong</i> の 9 つの非対格動詞について、能動態と受動態のどちらが文法的に適切かを選択させた。 分析の結果、第一に、熟達度が高くなるにつれて全体的な正答率が上昇し、学習者は発達とともに適切に能動態を選択できるようになることが示された。第二に、主語名詞の性質が過剰受動化に強く影響することが明らかになった。特に、移動不可能な無生物主語は最も困難であり、有生の人間主語は最も容易であった。また、移動可能な無生物主語はその中間に位置し、主語の有生性だけでなく、移動可能性も重要な要因であることが示された。第三に、発達の仕方は主語条件によって異なっていた。有生主語では下位中級段階で大きな改善が見られた一方、移動不可能な無生物主語では上位中級段階でも困難が残った。さらに、<i>remain</i> や <i>belong</i> など一部の動詞では特に正答率が低く、過剰受動化には主語条件だけでなく、個々の動詞の語彙的意味も関与することが示された。 以上の成果は、非対格動詞の過剰受動化が統語的構造の類似性だけでなく、主語名詞の性質、文脈解釈、語彙的意味、熟達度発達が相互に関わる現象であることを示している。今後は、各動詞に複数の項目を設け、動詞効果と文脈効果をより精密に検討するとともに、産出課題や容認性判断課題も取り入れ、学習者の知識と実際の使用の関係を明らかにしていきたい。